



基本構想

第2章 本市の現況

本市の将来像を描き、長期計画を策定するためには、本市の置かれている歴史と現況の中で培われてきた特性を明らかにする必要があります。

1 位置

本市は、濃尾平野の北東部、名古屋市の北方約15キロメートル圏内に位置しています。

北部から西部にかけては、犬山市・大口町・江南市・岩倉市に接し、東部から南部にかけては、春日井市・豊山町・師勝町に接しています。



2 交通条件

本市は、東名・名神高速道路及び中央自動車道の結節点と2つのインターチェンジを有し、また南北には国道41号が、東西には国道155号が伸びており、道路交通網が発達しています。更には名古屋高速道路と小牧インターチェンジを結ぶ名濃道路の建設が進められています。

鉄道は、名鉄小牧線が南北に走り、小牧駅をはじめ5つの駅を有しています。現在、小牧線を名古屋都心と直結するための上飯田連絡線の建設が進められています。また、東西には、小牧駅と桃花台ニュータウンを結ぶピーチライナーが走っています。

バス路線は、小牧駅からJR春日井駅、名鉄岩倉駅、桃花台センターからJR高蔵寺駅を結ぶ路線を中心に運行されていますが、バス利用者の減少により路線の休廃止が進んでいます。これに対応し市民の足を確保するため、平成10年度(1998年度)からは市の経費負担により巡回バスを運行しています。

更に本市南部には名古屋空港があり、本市は全国のみならず世界に開かれた交通の要衝としての地位を占めています。



3 自然

市域面積は62.82平方キロメートルで、東西約15キロメートル、南北約9キロメートルと東西に長く、愛知県内31市中13番目の広さです。

地形は東部が丘陵地で、その最高標高は天川山の279メートルです。市の中央部には、平坦な洪積台地の段丘地形が広がり、西部の沖積地とともに、この平坦地は多くの市民が住む市街地や産業集積地域として活用されています。

犬山市域と連なる本市の丘陵地は、愛岐丘陵とも呼ばれています。この丘陵は岐阜県域から名古屋市東部地域、更には知多半島に連なり、比較的緩やかで自然環境豊かな地域となっています。

中部地方では過去に内陸直下型の大地震が発生したことがあり、現在でも各地で大小の地震が発生しています。本市を直接横断する活断層はありませんが、比較的近く規模の大きな活断層としては、根尾谷断層や養老断層があります。

4 歴史

中心市街地と農業地帯の形成

市域には、原始時代から中世にかけての遺跡が多数残り、先祖の足跡が残されています。特に鎌倉時代・室町時代には、現在まで続く集落の基礎が各地で形成され、多くの未開拓地を残しながらも農村地帯を形成していたとみられています。

その後、戦国時代には尾張・三河から三英傑が輩出し、全国の統一に向けて覇権を競うにおよびますが、本市にとっても、重要な動きが起こります。

永禄6年（1563年）織田信長が小牧山に城を築いて清洲から移り、城下町が形成され、今日の小牧市街地の基礎が作られました。城下町の時代は、信長が岐阜に移ったため4年間で終わりますが、城下町はその一部が残り町筋が存続していました。

続いて、天正12年（1584年）秀吉と家康が争った「小牧・長久手の合戦」が起こり、本市を南北に分けて持久戦が展開され、本市の名を歴史にとどめることになりました。

戦乱の世が過ぎ、やがて平和な江戸時代に入ると、尾張藩の城下町は、清洲から名古屋へと移転され、それに伴って、名古屋と中山道を結ぶ尾張藩の官道「木曾街道」が開設されました。これにより、小牧山の南にあった城下町の名残（元小牧）は、街道の宿場町として整備されることになり、小牧山東方の現在の市街地へ移転しました。

この町筋には本陣が整備され、尾張徳川家の別荘である「御殿」も築かれました。後には、尾張藩の小牧代官所も置かれ、小牧はこの地方の政治・経済の中心地として発展しました。

また、江戸時代には、農業の振興に欠かせないかんがい用水として、入鹿・木津などの用水が築かれ、新田も盛んに開拓され、新田村が多数成立しました。

こうした努力の積み重ねが実り、昭和30年代に至るまで「小牧菜どころ米どころ」といわれた農村地帯が築かれました。

近代都市の形成

本市は、明治22年（1889年）の新町村制、39年（1906年）の町村統廃合を経て、昭和30年（1955年）1月1日、県内21番目の市として誕生しました。

市制が施行されて間もない昭和34年（1959年）には伊勢湾台風に見舞われました。その被害の復興を契機に、農業依存からの転換と財政基盤の確立のための積極的な工場誘致が進められ、人口も飛躍的に伸びました。

その後、昭和40年代には、東名・名神高速道路及び中央自動車道が開通し、名古屋空港と合わせ、中部圏の陸・空両交通の要衝としての地の利を生かし、田園都市から、周辺地域の人々にも働く場を提供できる活力に満ちた自立性の高い内陸工業都市へと大きな変化を遂げました。

昭和52年（1977年）には県内10番目の10万人都市となり、着実に発展しています。



昭和30年1月1日 市制施行



昭和40年6月30日 小牧インター完成